Memory

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｍｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ３７３２Ｗ

【作者名】
椿姫

【あらすじ】
平凡な高校生活を送る、石倉史夜。

しかしある時、親友たちの記憶がなくなってしまう
いま、史夜の戦いが始まる

人物説明（前書き）

新連載です。可愛がってあげてください

人物説明

石倉史夜
（いしくらふみや）

本編の主人公
行動力があり、思いついて２秒後には行動を始めている
メンバー内ではボケとして活躍する
学力はそこそこで、全ての科目で平均点は取れる
記憶喪失にならなかった人間の一人
それゆえに、悠貴や槭といった親友たちや、彼女である葉月の記憶を取り戻すために行動する
ギターをやっており腕前はプロ顔負け
身長１６７センチ、体重５５キロ

中村悠貴
（なかむらゆうき）

史夜の親友
リーダーシップが強く、皆のまとめ役的存在
非常に頭がよく、県内有数の高校に推薦で入学するほど
ギターをやっていて、史夜と一緒に練習するなど学業と趣味を両立できる
歌がうまく、槭や史夜と良くカラオケに行っている
高度すぎるため、突っ込む槭が説明をつけなくてはならないほどのボケを繰り出す
身長は１７５センチ、体重６３キロ

保谷槭
（ほうやかえで）
史夜の親友
頭の回転が速く、窮地でも機転を利かした策を講じることができる
学業はそこそこの高校で2位であることから高い事が伺える
史夜を始めとするメンバーのボケに一人で突っ込みを入れるため、
語彙が豊富
ロリコンに侵食されつつあるが、本人は自覚していない
非常にタフで、骨が折れても3日で治る（理由は後述）
身長は１６８センチ、体重５７キロ

佐竹葉月
（さたけはづき）
史夜の彼女
悠貴、槭が口をそろえて「この世のものとは思えないほど可愛い」
というほどの美少女
悠貴に匹敵するくらい頭がよく品行方正と女神の様な女の子
身長は史夜よりも小さく、史夜と並んだ姿は槭曰く「中学生の兄妹」
やや天然であるため、時々槭に突っ込まれる
成績は優秀だが、史夜が行くという理由で自分より圧倒的に下の学
校へ進学、勿論学年トップをキープしている
身長１５５センチ、体重〔ｓｅｃｒｅｔ〕

蘇芳椿姫
（すおうつばき）

槭の幼馴染の女の子
しかし親の都合で中学は違ったため、記憶喪失にはなっていない
同い年だが身長は１４０センチしかなく、一見小学生高学年
しかしその外見から想像もつかないくらいに力が強く、槭はからかってはは吹き飛ばされるという漫才を演じている
幼少のころからその漫才を続けてきたため、槭は異常にタフになったちなみに、木の板に穴を開けるくらい普通にできるといわれている
史夜、悠貴とも面識があり、史夜に聞かされて槭達の記憶喪失を知る
彼女のせいで、槭はロリコンに浸食されつつある
身長１４０センチ、体重［ｓｅｃｒｅｔ］

白沢雪姫
（しらさわゆき）

悠貴の彼女、頭の回転は槭に匹敵し、記憶も失っていないので史夜たちの頭脳として活躍する
スレンダーだが出るとこは出ており、よく椿姫から羨望の視線を浴びている
以外に毒舌でツンデレ気味
身長１５６センチ、体重［ｓｅｃｒｅｔ］

備考

登場人物は椿姫、雪姫を除いて同じ中学校出身である

記憶喪失

本編で言う記憶喪失とは、ある時期の記憶だけがすっぽり抜け落ちるという特異なものである。なぜ発生するのか、なぜ史夜だけが記憶をなくしていないのかは、一切わかっていない

治療方法としては、主に鍵と呼ばれるアイテムとそれに関係が深い出来事を体感させることによって記憶を取り戻すと言われている

1話　　消える記憶

「どうなってんだよ・・・一体」
石倉史夜は走っていた。目的の場所が少しずつその姿を現す
「みんなの記憶が・・・無くなるなんて」
目的の場所、それは中学の頃、一緒にいた仲間でよく遊びに来ていた公園
今は見る影もないが、昨日までは遊具が多く、史夜たちもここにあったバスケットゴールを使ってバスケをしていた
しかし、大地震の影響で地盤が緩み、ほとんどが倒れ、地面に呑まれていってしまったのだ
「・・・畜生」
下を向いて地面を睨みつける。しかし、地面は何も返さない、それどころか史夜を嘲笑っているようにすら見える

8月1日。この日、史夜の通っていた中学校の生徒が、一斉に記憶をなくした

史夜がそれに気付いたのは、昨日の夕方のことだった

7月30日、七月最後の日の朝
史夜は、久しぶりに彼女、佐倉葉月とデートの約束をし、待ち合わせ場所である駅前へと向かっていた。

「そろそろ着くか・・・お、あれは・・・」
駅前のコンビニ、そこに見知った影を見つけて、史夜は声をかける
「お～い！！楓！！」
名前を呼ばれた男が振り返る
「こんなとこで何してんだ??」
男は史夜を見てため息をつき
「なんだ、史夜か」
「なんだそのため息は、ケンカ売ってんのか。ってそれは置いといて・・・何してんだ??こんなところで一人さみしく本なんか読んじゃって」
楓、と呼ばれた男、保谷楓は、読みかけの本を元に戻してから
「椿姫と遊びに行くんだ」「なんと!?何で誘ってくれなかったんだよぉ～」
「昨日誘おうと電話したら『明日は久しぶりに葉月とデートなんだーうふふーうふふー』って言ってたから誘わなかっただけだが??」
「ちょっと待て、最後の『うふふー』はお前が勝手に付けたろ」
「おっと、間違えた。『でゅふふー』だったな」
「そんな変態的な笑い方はしない！！」
一通りいつも通りの言葉遊びをを繰り広げてから、史夜は本題に入る
「で…2人きりなのか?」
「本題がそれって・・・。ああ、そうだよ」
「なん・・・・だと??」
「何処の●護だお前は」
ボケに突っ込む楓、これもいつも通り
「なに?付き合ってんの?」

目をキラキラさせて槭に詰め寄る史夜
「隣に絶世の美少女が居るのに他の女を気にしちゃいけねぇよな。よ、佐倉」
瞬間、史夜は横から冷徹な殺気を感じた
「おはよ、槭。

で・・・史夜??覚悟はできてる??」
史夜の隣にいる美少女。史夜の彼女である葉月である。
なぜここにいるのかは分からないがにっこり笑っている。笑顔自体はとても愛らしいのだが右手には・・・

「あの・・・葉月さん。その右手に持っているバチバチ電気走らせてるそれは一体何でしょう・・・」
「これ??これは・・・

スタンガンだよ??」
「んなこた分かってんだよ何でそれをあぎゃぎゃぎゃがあががががくぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ;」
発言の途中で脇腹にスタンガンを押し当てられ、感電する史夜
「おい、それ以上は・・・」
さすがに見かねたのか止めに入ろうとする槭、だが
「・・・・・・（キッ）」
「じゃ・・・じゃあな史夜!!二人で楽しむといい」
「お前逃げんな!!このままじゃ死ぬ・・・・ガクリ」
そのまま、史夜の視界にはもやがかかり、ゆっくりと落ちて行った・・・

史夜の日常、全く持って、いつもどおりである

「史夜大丈夫??」
スタンガンを放り投げて史夜を心配する葉月、彼女は本来ならあんなことをしない。
史夜第一主義で、史夜のこととなるととたんに周りが見えなくなる困った性格をしている

今回も…

「あれ?葉月!!お前の投げたスタンガン…あぎゃあがががが」
投げたスタンガンの先にいた槭にヒット、死者がもう一人増える
「あれ?槭、どしたの?」
倒れ伏す槭に近付く影、見た感じ小学生に見える少女が、時折ピクピク動く槭を足蹴にしている
「う…うぅむ…」
その衝撃か、槭が目を覚ます
「ん…なんで足蹴にしてんだよこの幼女」
目を覚まして早々に自分に危害を加えている幼女に暴言を吐く
「なによ、起こしてあげたんでしょ?」
「起こし方ってもんがあるだろうが、なに足蹴にして起こすとか、バカなんですか?」
「槭!!史夜が!!」
「それは間違いなく自業自得だ、気にするな。どうしてもって言うならこの幼女と同じように足蹴にして起こしてみろ。新しい世界に目覚めるか起きるだろ」
「新しい世界に目覚めてもらっても困るので…えい」
「ひっぎゃぁぁぁぁ!!」

葉月がとった行動は、再びスタンガンを押し当てると言う、極めて残虐な行為だった

「……死ぬわ！！」

起きた史夜。

「……あのさぁ、なんの嫌がらせなの？人が働いてる店で」

しびれを切らしたのか、店員が声をかけてくる

「「「「あ、悠貴」」」」

声をかけた店員、悠貴が嘆息しながら

「いきなりスタンガン出すわ感電するわ…」

やれやれといった感じに話す悠貴

「あ、時間だ」

「こっちもだ、んじゃ」

槭と史夜が同時に腕時計をみて、四人が出口へと歩いていく

「…ってちょいちょい！！待てって！！」

悠貴の言葉に皆が振り返ると

「全く…」

眼鏡を指で押し上げ、史夜達を睨んでいる

「…これください」

なにを思ったか、槭がアイスをレジに持っていった

「暖めますか？」

「…聞くまでもないだろ」

悠貴はそれを聞いて

「では少々お待ちください」そういうとレンジにアイスを入れて…

「どうしてそうなる？別にさ●ぁ～ずのネタじゃねぇんだからあえてやるんじゃないの」

「ふむふむ…１０分と」

「やめとけ、アイスが原型も残らないじゃないか」

二人がそうしているうちに、アイスが熱に負け、形を崩し始めた

「がんばれ！！諦めるな！！」
「そうだ！！お前はそんなに弱くないはずだ！！」
「アイスにそんなもの求めるな！！」
見かねた史夜が突っ込む
「そうだ！！それに中村くん、君は仕事中だろう！！」
史夜の後ろからコンビニの店長らしき人が怒鳴り込んでくる
「黙れジジィ！！」
槭が反射的に近くにあったおにぎりを顔面に投げつける
「バッお前！！なにしてんだよ！！」
史夜が止めるが時すでに遅し、店長はアニメなら青筋が３つ位浮かんでいそうな位キレていた
「槭！！行くよ！！」
椿姫が槭の腹に一撃入れ、気絶させてから軽々と運ぶ
見た目小学生が高校生を持ち上げている絵は、良い感じにカオスだった
「俺らも行くぞ！！葉月！！」
「うん！！」
史夜たちも後に続き、逃げるようにコンビニを出た
「史夜、私たちはこのまま遊びにいくから」
コンビニから少し離れた所にある公園に入ると、椿姫が未だに気絶している槭を担いだまま史夜にそういってくる
「そっか、俺たちもそろそろ行くか」
時刻は１０時を回ったところ、遊びにいくには少し早いが、良い時間だ
「それじゃあね。葉月、頑張んなさいよ」
葉月に耳打ちしてから悠々と歩き去る椿姫を見送っている史夜にバレないように、葉月は紅潮した頬を隠すために顔を伏せる
「どした？具合でも悪い？」
「ふぇ！？だ…大丈夫だよ？」
全力で否定する葉月を見つめ、史夜がとった行動は

「ちょっと待っとれ、飲みもん買ってくるから」
史夜はすぐ近くにあった自販機に向かう
「なにがいいかな…とりあえずコーラとオレンジジュースでいいか」
二つを持って葉月の元に戻る
「どっちがいい？」
「ん…オレンジ」
葉月にオレンジジュースを渡して、コーラを開ける
「この公園…懐かしいね」
「あぁ…中学の時によく遊んだな。そんなに前でもないけど」
この公園は史夜達にとって思い出深い場所だ
「ん？葉月、この公園桜なんかあったっけ？」
史夜の視線の先には、大きな桜の木があった
「私の記憶にもないけど…誰かが植えたんじゃないかな？」
「にしてはデカ過ぎるだろ…」
どうみてもここ一年植えられた桜ではない。しかし桜は最初からあったかのように居座っている
「まぁいいか…そろそろ行こう。開園時間だ」
史夜は空き缶を離れたくずかごに難なく二個連続で放り込み、ベンチから立ち上がる
「もうそんな時間か…史夜といると時間が早く過ぎるね！！」
「そうだな…楽しいからかな」
二人は手を繋いで目的の場所へと向かう。

目的の場所、それは
「わぁ…キレイな魚がイッパイ」

水族館だった。史夜達は海コーナーにいる
「お、マグロだ、でっけえな」
マグロをみて驚嘆の声をあげる史夜は、必死であるものから目を逸らす
（あれ…くらげ？だよな…でもピンク色だし…オモチャ…か？にしても…）
「なんで寿司なの？非常に場違いだべ？」
なぜかそのくらげは高級そうな寿司を食べていた。マグロの前で
（あれは気にしちゃいけないな。）
「みろ葉月！！クリオネだ！！」
「嘘！？どこどこ？」
うまく葉月を誘導して、くらげから離れる
「見て見てうなぎの蒲焼き！！」
（水族館に！？）
「見ろあれ！！熱帯魚！！」

史夜と葉月は、閉園時間ギリギリまで水族館を楽しんだ

その帰り道
「楽しかったね～」
「全くだ、キレイな魚がいっぱいいたからな」
二人は、帰り道を歩いていた
「あ、今日はここで良いよ」
「ん？そうか、それじゃあまた」
手を振って、一人で歩き出す

「さて…これからどうしよう」
葉月と別れてから数分、史夜は公園でため息をついていた
「家に帰ってもやることないしな…ふらつくか」
とりあえず駅前をふらつくことにした

それが起こったのは唐突だった
〜グラッ〜
「地震！？」
史夜は思わず地面に膝をつけていた。それくらい大きな地震だったのだ
揺れはいっこうに収まらず、史夜は携帯を出しながらも辺りを警戒し続ける
「葉月は平気か…！！［ただいま、回線が込み合っているため、しばらくたってから、お掛け直しください］…くそ、だめか」
揺れが収まり始め、史夜の頭のなかに槭の言葉がよみがえる
『地震とかの災害のあとは、携帯が繋がりにくい、テンパって掛けると繋がらないから、安全な場所に避難してからでも遅くはない。まずは自分の安全を最優先しろ』
「どこかに避難できる場所は…」
辺りを見回すが、安全な所など無いに等しい。史夜は数秒考えて、公園を選択した

「おいおい…冗談だろ？」

公園についた史夜が見たのは、地獄のごとき光景だった
ベンチや自販機、遊具が殆ど無くなっている。否、液状化した地面に呑み込まれている
僅かに突き出したベンチの足がそれを証明している
「冗談きついぜ…」
史夜は家の安全を確認すべく、自宅へと走った

「母さん！！」
幸いにも自宅に問題はなく、中に入って家族を呼ぶ史夜

「史夜…無事だったのね」
史夜の母は寝たきりで、家が崩れたら真っ先に死んでしまうだろう位に弱い

「他のみんなは？」
「みんな仕事にいってるはずだから、帰ってくるのを待ちましょう」
母の言葉にうなずき、テレビを点けてニュースを見る
やはり、不思議なことに建物は一切崩れていない。本当に揺れただけのようだ

地震のあった日の翌日、史夜は親友と葉月の安否を確認すべく、それぞれの家へと向かっていた
「揺れただけなら心配ないと思うが…」
まずは家が近い槭の家に向かう

5分後、史夜は悪夢を見る
「よう槭」
「…誰だお前」
思わず息を飲む
「何の冗談だよ、いきなり」
「お前こそなんだよ、少なくとも俺の記憶の中には心当たりがない」
(嘘だろ?)
「ほら、中学んときに…」
「中学?…おぼえてねぇ。用はそれだけか?なら俺は帰るぞ」
槭は史夜の制止の声に見向きもせずに家の中に入ってしまった
「まさか…な」
きっと新手のイジリだろう。そう考えた史夜は、悠貴の家に向かうことにした

答えは簡単だった。
「俺はお前のことを知らねぇ」
槭と同じことを言われ、史夜は薄々気づいていた
（恐らく記憶喪失で間違いない…でも）
唯一の希望、葉月が先の道を歩いていた
「葉月！！」

思わず大声で呼び、走る
きっと彼女なら、
忘れるはずがない、
忘れていないでくれ、
頼むからこれ以上、絶望させないでくれ。

確信は、いつしか懇願に変わっていた

「どちら様…ですか？」

そして、その懇願さえ、儚く消える。

「いえ…人違いみたいです…」
怯える葉月に背を向けて走る、あてもなく、ただひたすらに

ついたのは、公園だった

「みんなの記憶が…無くなるなんて」
からだが空っぽになったかのような虚無感、それが今の史夜を満たしていた
「は…はは、なっさけねぇ」

虚ろな目で、そう呟く。その言葉に呼応したかのように、雨が降りだした。
瞬く間に豪雨となり、史夜の体を冷たく濡らす
しかし史夜は動かず、只只雨に打たれ続ける
「…史夜？」
不意に、誰かが史夜を呼ぶ
「椿姫…か？」
声をかけたのは椿姫だった
「傘も差さないで何してたの？」
史夜は話した。槭達が、自分の記憶をなくしていること、葉月に、怯えられたこと
「あたしもそうだったよ、槭に…忘れられてた」
椿姫の目には哀しみが宿っている
「どうするか…」
「記憶を取り戻す手がかりがあれば良いんだけど…」
そういって思案する。しばらくして
「あたしたち二人でやろう。記憶を取り戻す手がかりを見つけるんだよ」
「…それ、私も参加するわ」
声のした方、二人より身長の高い少女が、傘を差して立っていた
「「雪姫…」」
白澤雪姫、悠貴の彼女である
「私も忘れられてたの。悠貴に」
どうやら雪姫も今回の被害者らしい
「さて、まずはどうするか…」
一人では無理でも、3人なら出来ることがあるはずだ。史夜は考えた。必死で、わずかな可能性すら見逃さないように…

「記憶って、思い出よね」
ポツリと呟いた雪姫、それを聞いた史夜の頭のなかにある考えが浮

かぶ
「思い出…そうか…」
二人が怪訝な顔で史夜を見る
「思い出だよ。記憶を取り戻すキー、それを集めればいい」
「どういうことよ？」
史夜は自信満々に告げた
「思い出深い何か、場所や物と言った鍵をあいつらに見せるんだ。うまく言えないんだけど、思い出はひとつ思い出せば連鎖して思い出すものなんだよ。だから…」
「成る程、簡単にすると例えば私と悠貴しか知らない事を、悠貴に話す事によって、その記憶を取り戻す。ってことね」
「そうだ。でも三人で一人ずつ当たっていこう。最初は…槭からだ」

それぞれに思いを乗せ、史夜たちは結束した

「……っくしょい！！」
「傘差さないで雨に打たれてるからよ」
最後の最後でしまらない史夜だった

2話　記憶の尻尾

第一日目

「まずは情報交換ね」
雪姫が切り出す
史夜たちは、そこそこ賑わっているカフェにいる
「あいつらがどこまで忘れているのか、それを見極めなきゃな…」
史夜は携帯を取りだし、ある番号に掛ける

数コール後、ある人物が電話に出た
「ぷるるんか？」
『ぷるるんじゃ無いよ！！で、何の用？』
「俺が誰だか分かるか？雫ちゃん」
『石倉史夜でしょ？槭の友達の』
電話に出たのは槭の妹、雫だ
「そこに槭居るか？」
『居るけど…槭に掛ければいいんじゃないの？』
「それがさ…」
史夜はかいつまんで説明した
『成る程…で、ウチに何をしろと？』
「中学の時のことと、椿姫のこと、それと悠貴のことを聞いて見てくれ」
『わかった。槭！！』
待つこと数分
『結果を簡潔にまとめると、椿姫の事は高校からの知り合いとしか覚えてなくて
、他の二つは覚えてないみたい』
「そっか、ありがと。それじゃ」

携帯を切り、椿姫達に報告する
「成る程…」
雪姫が腕を組む
「現時点では、中学の記憶が無くなってるみたいね、椿姫の場合は小さい頃の記憶もみたいだけど」

「恐らく悠貴も似たような感じだろう、葉月も…」

葉月、嫌でも思い出してしまう。あの顔を、怯える顔を
「史夜、悲しむ暇はないよ。記憶を取り戻せれば元通りになるんだから…」
落ち込む史夜を慰める椿姫
「とにかく、本人に確認して見ましょう」
雪姫の示す先、槭がのんきに散歩していた
「あれ？家にいたはずじゃ…」
「お、蘇芳！」
見つけたらしい槭が走り寄ってくる。
「あれ？お前…」
史夜を見つけて怪訝な顔をする槭
「あたしの友達よ、石倉史夜って言うの」
すかさず椿姫がフォローに入る。
「そうだったのか、よろしくな、石倉」
「あ…あぁ…」
史夜は複雑な心境ながらも槭と握手を交わす
「保谷、その携帯についてるストラップって…」
史夜が言っているのは、昔に槭にプレゼントした尻尾のようなストラップの事だ
「ん？これか？これは…
（おかしい、思い出せない。かけがえない友人からもらった気がす

るんだが…）知
り合いに貰ったんだ。」
史夜は見逃さなかった。一瞬、ほんの一瞬だが、槭が眉を潜めたのを
（二人とも、あれが鍵だ、あれに関係がある出来事を話してみるよ）
「もしかしてさ、それって、その知り合いが実家に帰ったときに買
ってきたやつ
じゃないか？」
「え…たぶんそうだ」
「その時にさ、他にも何人か渡されてなかった？」
「ん…あぁ、確かそうだ」
その後もいくつか質問を投げ掛けたが、芳しくなかった
「じゃあ俺はそろそろ行くぞ、じゃあな」
結局、大した成果もなく、槭は帰ってしまった
「うーん…あれが鍵じゃなかったのかなぁ…」
史夜は落ち込み気味にコーラを飲む
「でも鍵ではないにしろ、手がかりではあるはずだわ、根気強くや
りましょう」
雪姫は優雅に腰掛け、紅茶を飲んでいる
「はむっ…んん～♪」
そんな中で一人、椿姫はパフェにがっついている。その横には空の
パフェ皿が二
つ
「よくこの状況で食べられるな」
呆れたように史夜が呟くが
「こんなときだからこそ、だよ」
椿姫はそれだけ言うとまたパフェに取りかかる
「……太るわよ」
―ビシッ…―
雪姫の呟きで、椿姫がピタッと停止した
交互にパフェと雪姫を見て、史夜にパフェを差し出す

「……食えと？俺に？」
コクコクと頷く椿姫。若干目が潤んでいる、かなりダメージを受けたらしい。
「雪姫、食え」
「嫌だ、太る」
―ビシィッ…―
雪姫の追撃。椿姫は顔を伏せてしまった
「なぁ、いじめすぎと違う？」
「それより、そろそろ解散しましょう。いつまでもここにいるわけにいかないもの」
雪姫はそう言って立ち上がり、史夜たちを見てから
「調べてみるわ、記憶喪失について、何かわかったら連絡するわ」
そう言って去ってしまった
「椿姫？俺達も行こう。調べてみないとわからないことだってあるんだよ」
「うん…」
その日から3日ほど、史夜たちは記憶喪失についての資料を調べ続けた。

そして5日目、ある出来事が起きる

その日、史夜は珍しく昼まで寝ていた。
～ピリリリ！！ピリリリ！！！～
「ん・・・んぅ」

バイブレーション機能が強すぎるため、狂乱するかのように暴れまわる携帯をキャッチし、電話に出る史夜
「ん・・・なんだ??」
『何だじゃないわよ!!今どこ!?』
声から察するに、雪姫だ。史夜は寝ぼけているので
「ん・・・家」
『急いで公園近くの工場跡に向かって!!』
「なんでだよ・・・まだ眠・・・『椿姫がさらわれた!!』・・・は???」
雪姫の一言で、完全に覚醒した史夜は、雪姫の言った言葉を数秒掛けてゆっくり飲み込み、理解した
「どういうことだ、一体だれが!!」
『槭に恨みを持っていた連中みたい。何処からか槭と椿姫の事を聞いたみたいで・・・』
今の槭は記憶を失っている。つまり槭にとって椿姫はそこまで重要な存在じゃない
「すぐに行く、槭に連絡を取ってくれるか??」
『分かった。気をつけて』
「ああ」
携帯をベッドに放り投げ、寝まきから着替えに取り掛かる。引き出しを開け、あるものを探す
「一応持っていくか」
史夜が手にしたのは、いつだったか槭がくれた警棒。ところどころさびているが、今だずっしりとその存在を示している
「・・・にあわねぇな、こんなキャラ」
鏡に映る自分を見て苦笑した後、家を出る
「そう言えば、昔似たようなことあったな」
そう呟いて、史夜はバイクにまたがった

～その頃、椿姫～

「なぁ、ほんとにこれでアイツが来るのか??」
猿轡されているために声を出せない。椿姫は冷静に今の状況を整理しようと試みる
(なんで私が捕まるのかしらねェ・・・眠いし寝ちゃおっかな)
訂正。単に状況を理解してなお特に何も感じていないだけだった
「それにしてもこいつ拉致られたってのに不思議なくらい緊張感ないな」
男の一人が呆れながら椿姫を小突く
「あれじゃないか??頭ん中までお子様なんじゃないの??」
別の男が馬鹿にしたように笑う
(めんどくさいわねぇ・・・やろうと思えば三秒で全滅させられるのよ??)

虚言ではなくマジ。それをしないのは、単に眠いだけだ
「・・・ん、誰か来たぞ」
耳をすませると、バイクの駆動音がする。少し改造がされているそれは、独特のモーター音を響かせている
（この音・・・史夜！？）
聞き覚えがあるその音に、椿姫は確信する。助けにきてくれたのだ
数秒後、駆動音がプツリと止み、史夜が入ってくる
（そう言えば・・・史夜ってケンカ強いのかな？？）
微妙に不安になる椿姫だった

史夜が工場跡に乗り込む少し前、槭は雪姫からの電話を受けていた
『もしもし！？槭！！』
「オマエはたしか…雪姫、だったか？」
『それはどうでもいいの！！大変よ！！』
「はぁ？」
『椿姫が拉致られたのよ！！』
「誰に！？」
『アンタに恨みを持っている連中よ！！』
槭は数秒考え、雪姫に告げる
「中山達か！！」
『その中山かは分からないけどたぶんそう。いま史夜が向かってるわ』
槭の脳内に忌々しい顔が浮かぶ、その顔を消し、槭は考えた
（史夜が向かってる？）
瞬間、何かが槭を貫いた

「…雪姫、椿姫達は何処だ」
「公園近くの工場跡よ、わかる？」
「当たり前だ、俺が知らないはずがない」
「ちょ……」
通話を切り、バイクにまたがる
「おかしいな、知らないはずなのに…知っている感じだ」
史夜のと色違いの漆黒のバイク。やはり改造されており、史夜とはまた違ったモ
ーター音を響かせる。その音はまさしく
「急ぐか、相棒」
―ヴォンヴォンヴォンヴォン！！―
狼の咆哮のごとき爆音を響かせて、槭は黒い風となった

そして現在

「中山…てめぇ…」
槭はリーダーらしき人物を睨み付ける
「よぅ保谷、今日はお前に引導を渡してやるよ」
中山が唇の端を吊り上げる。気持ち悪いことこの上ない

「お前がだろうが、椿姫に手ぇ出したやつは殺す」
「俺は！？」
「お前状況分かってんのか？その気になればこいつを殺すことだってできるんだぜ！？」
中山の声が上擦っていく
（そういえばコイツ椿姫の怪力知らないんだった）
「やれば？出来るならだけどな」
槭も唇を吊り上げる
「ねぇ…俺は？」
史夜が話に入ろうとするが、二人は自分達だけの世界に入ってしまっている
すでに中山以外は逃げているため、椿姫の回りには誰もいない。
「とりあえずはずすか」
椿姫のもとに近寄り、縄を外し、猿轡を解く
「すぅ…」
寝てしまっていた
「起きろよ、緊張感ないな」ぺしぺし
「んぅ…」
「オイオイ」
ぺちぺち
「んにゃ…」
「もういいか、持っていけば」
てくてく
「中学の時のようにはいかないぜ」
てくてく
「中学？？」
ぴたっ
（そういえばそうだったな、昔も似たようなことあった）
昔、というか中学の時に全く同じ事件が起きた事を思い出す

「記憶の尻尾・・・」
史夜がポツリと呟いた言葉、それが弾丸のように槭に突き刺さる
（なんだ？いまの言葉…何かが引っ掛かる…）
「…記憶の…尻尾」
槭が呟いた瞬間、怒濤の勢いで何かが流れ込んでくる。それは、知らないはずなのに、懐かしい記憶
（これは…記憶？誰の…記憶…）
最後に、一際強い何かが流れ込んでくる。それは温かく、
「槭！？」
視界が歪み、暗くなる
史夜が気づくが遅い、槭は倒れてしまった
「え…なに…」
中山はなにが起こったか分からないらしく、目を白黒させている
「ん？んぅ…」
史夜の声で目覚めたのか、椿姫が起き上がり、焦点の合わない目で槭をみる
「槭！！どうしたの！？まさか中山に！？何しやがんだあの野郎！！」
「落ち着け！！錯乱するな！！最後の方おかしいから！！」
錯乱して男口調になっている椿姫を全力を以て押さえつける史夜
「椿姫、ステイ」
突然、重厚な声が響く。
見ると槭が起き上がり、絶対零度の視線で椿姫を射抜いている
「はい」
気を付け→敬礼を神速で行う椿姫、それを呆然と見ていた史夜は
（犬！？）
率直に思った
「中山…死にたくなかったら消えろ、今すぐに」
椿姫を見つめたまま、殺意を押し殺した声で命令する

「は…はい！！」
脱兎の勢いで逃げ去る中山
「槭……こえぇ」
思わず呟かずにはいられない史夜だった

そのあと史夜達は工場跡で話し込んでいた
「なぁ槭、もしかして記憶…」
「あぁ、戻った。迷惑かけたな」
「じゃあ…あたしの事も」
「思いだしたよ、椿姫」
微笑む槭に椿姫の膝がめり込む
「〜〜〜！！！！！」
会心の一撃、槭に８０００のダメージ
「どんだけショックだったか知らないでしょ！！あたしが…どれだけ…」
怒りから一転、最後の方は涙混じりの鼻声になってしまっていた
「椿姫…ごめんな、忘れたりして」
槭は、泣きじゃくる椿姫の頭を撫で、優しく抱き寄せる
「端から見たらすごい変態やね」

～ゲシッ～
からかう史夜に神速の裏拳を決め、何事もなかったかのように抱き寄せられる椿
姫
（コイツ…なかなかできるな！？）
すごくムードぶち壊しの史夜を華麗にスルーし、二人は…
「椿姫大丈夫！？って…」
さらに追撃のごとく、雪姫が工場に入ってくる
「あんたたち…」
「みなまでいうな、雪姫よ。こいつらには、こいつらの道がある。
しかし槭、ち
ゃんと責任とれよ」
「「ちっがーう！！」」
「そんなことがあったのね、椿姫、もしデキてたら教えてね」
「え、ちょ、違うって！！」
椿姫が真っ赤になるが史夜はさらに畳み掛ける
「持ってないんだったら、ほら…やるからさ」
「これガムじゃねぇかよ！！ってかお前ら何させたいの！？」
「「別に」」
「よし、殺そう」
どこから引きずり出したのか、槭の手には鉄パイプが握られていた
「待て待て待て！！嘘だ嘘！！」

最後までいまいち締まらない史夜達だった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3732w/

Memory

2011年11月16日10時04分発行